

## ■ 売り材料をかなり織り込んだドルの下値は限られる！？

一時は「どうなることか」と少々深刻に考えさせられた年明け3日のドル/円の「瞬間的暴落＝フラッシュクラッシュ」であったが、どうやらこれも例の「アルゴ（アルゴリズム取引／売買プログラムによる自動取引）の仕業」ということになりそうだ。

米国のアップル社が前日（2日）の引け後に2018年10～12月期の売上高見通しを下方修正したことに反応したものではあるが、より実態に近いところとしては「年明け早々の…、そうでなくとも日頃から極端に商いが薄くなる時間帯において、たまたま飛び込んできたドル売り材料にアルゴリズムが過剰反応した結果」と見るのが適当であると思われる。

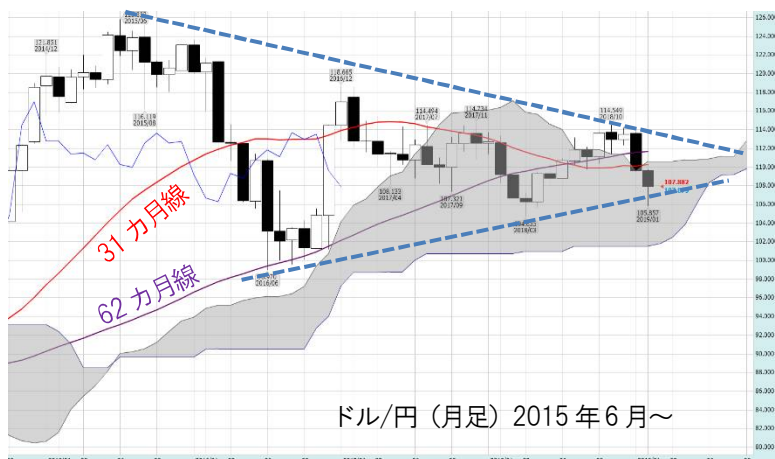
思えば、昨年12月のFOMC後に会見に臨んだパウエルFRB議長の言葉にもアルゴは過剰反応した。プログラム取引の判断は「白」か「黒」であり、よく言えばハッキリしているが、ときに理解不能なほど乱暴な市場価格変動の元凶となることも少なくない。

ある意味、そうした点を逆手にとったのが、年明け4日のパウエル議長発言ということになるだろうか。年明け3日に一時700ドル超の下げとなったNYダウ平均など、米株価の不穏な値動きに配慮し、講演では「金融政策を柔軟に見直す」などと発言して混乱の火消しを優先した。これにもアルゴは少々過敏に反応したということになるのだろう。翌4日のNYダウ平均は746ドル高となった。

その結果、全体にリスクオンの流れが復活して、ドル/円も執筆時までには109円台乗せを意識した値動きへ。109円処というのは、例のフラッシュクラッシュが起きる前にドル/円が位置していた水準であり、同レベルを手堅く取り戻せるかどうかが一つの焦点ということになるものと思われる。もっとも、昨日（01/09）公表された昨年12月開催分のFOMC議事録の内容を受けて、足下のドル/円は再び108円割れの水準まで下押しており、また少し109円台固めへのトライは遠退いた感もないではない。

とはいえ、下図でも確認できるように、目下のドル/円は「基本的に2015年6月高値からの三角保ち合い（トライアングル）を完成させようとしている」との見方がいまだ継続できるとするならば、当面の下値は自ずと限られると見ることもできると思われる。

ここで、仮に2015年6月以降の対ドルでの円の強気を「5波構成」とするならば、今年年初のフラッシュクラッシュ後の直近安値は「第5波」の終点と見ることもできるだろう。そうであるとするならば、次に意識されるのは、まず「31カ月線」、「一目均衡表の月足『雲』上限」、「62カ月線」、「2015年6月高値と2018年10月高値を結ぶライン」といった順番になるだろう。



正直、昨日の市場で見られた強めのドル売りについては、その要因とされたものが多分に蒸し返しの材料であると考えられ、実際には先週4日以降のリバウンドに対して目先の利益を確定する動きもあったものと思われる。

ドル/円について目線を下に向けるのは簡単だが、もはやドル売り材料が蒸し返し

されたり、一旦出尽くしたりしていることも一応は念頭に置いておきたい。

（01月10日 12:35）